

谷崎潤一郎

古典と近代作家 第一集

「古典と近代作家」の会編

笠間選書 117



《執筆者紹介》

長野 晋一	立教大学教授
遠藤 祐	フェリス女学院大学教授
上坂 信男	早稲田大学教授
矢作 武	相模女子大学助教授
石割 透	駒澤短期大学専任講師
志村 有弘	相模女子大学助教授

笠間選書 117 谷崎潤一郎

——古典と近代作家—— 第一集

昭和 54 年 3 月 31 日初版第 1 刷発行

定価 1,300 円

—検印省略—

編者 「古典と近代作家」の会

発行者 池田猛雄

印刷 三美印刷株式会社

製本 笠間製本所

発行所 有限会社笠間書院

〒101 東京都千代田区神田神保町 1-46

電話 03-295-1331 (代) 振替東京 1-56002

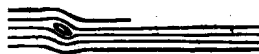
書籍コード 1391-953117-0924

谷崎潤一郎

——古典と近代作家——

第一集

「古典と近代作家」の会



笠間書院

目次

谷崎の「兄弟」……………	長野 嘗一…五
——古典との比較——	
谷崎潤一郎と古典……………	遠藤 祐…三三
——「誕生」と『榮華物語』など——	
『武州公秘話』の方法（試論）……………	上坂 信男…一四三
——谷崎と『源氏物語』——	
*	
芥川龍之介と中国文学（一）……………	矢作 武…一六二
——聊齋志異との関係——	
芥川龍之介と『今昔物語集』……………	石割 透…一八三
菊池 寛……………	志村 有弘…二〇五
——「袈裟の良人」論——	

谷崎の「兄弟」——長野管一

——古典との比較——

一 執筆のころ

大正七年二月、「中央公論」に発表した作品。作者数え年三十三歳。執筆の正確な年月は分からないが、同年正月か、又は前年末でもあったろう。

前項の「法成寺物語」が発表された時期からは、約二年弱の歳月がたっている。大正四年五月、谷崎は石川千代子と結婚して、本所区向島小梅町に新居を構え、翌五年三月には長女鮎子が生まれたことは、前項で述べた。同年六月、小石川区原町十五番地に転居、さらに同年十二月には、同原町十三番地に再度居を移している。転居好きで、生涯に何度も居所を移した谷崎としても、特にこのころはそれがはなはだしかったことが分かる。が、何といっても、この期間における彼の身邊の大事件は、結婚して父となったことと、母関を失ったことであろう。母が亡くなったのは大正六年五月十四日であるが、父倉五郎がその後を追うようにして死亡したのは二年後の大正八年二月十四日、さらには前に記した長女鮎子の生まれたのも同五年三月十四日である。十四日という日は、谷崎の肉親の生死に、よほど因縁が深かったことになる。

とりわけ、母関は、谷崎の思想の形成、文学の発想に、決定的な影響をあたえた人である。このことは、谷崎本人がしばしば語り、世間周知の事がらでもあるが、以後の叙述にも関係が極めて深いので、ここで総括しておきたいと思う。――

二 美しき母

母関は、祖父谷崎久右衛門の三女である。久右衛門・ふさの夫婦には、四男三女があったけれど、生涯の順序からいえば、三人の女子がまず生まれ、つづいて四人の男子が生まれたのだ。三人の女子とは、上から「花」「半」^{はん}「関」^{せき}の三名で、この三人はいずれも美人ぞろいであったが、なかんずく三女の「関」は、娘時代に美人絵双紙の大関に推されたほどの美貌であったという。身長は五尺そこそこだが、色あくまで白く、きめ細やかに、目鼻立ちの整った下町風の美人である。

母は娘の時分比較的裕福に暮したので相当に教育はあつたやうだ。私は子供の時分、十八史略の分らない所を母に質問して教はつた事を覚えて居る。彼女は非常に潔癖で、便所から出て来ると、両手の指をハウノキズミで擦つて、塩をつけて洗つて居た。（「私の家系」）

と、谷崎自身が記しているのより察すると、女学校は出ていなくとも、「十八史略」が読めるほどの教養があり、それに下町女らしく伝法肌で、めっぽうきれい好きであつたらしい。

崇高と云へば、何かそこに永遠的なものが含まれて居べきだと思ひます。私は空想の中で屢々亡くなった母の姿を浮べます。それも臨終の際の姿ではなく、いつ、どんな時の顔だか知れないが、

多分私が七つか八つの子供だった頃の、若い美しい（私の母は美しい女でした）母の顔を浮かべます。それが私には一番崇高な感じがします。（女の顔）

こうも又、谷崎はいう。右は大正十一年一月号の「婦人公論」で、「婦人が崇高に見える時」という題で彼の考えを聞かれたときに谷崎が答えたものの一節である。このあとに谷崎はつづけて、実際の場合に、女性を崇高な所へ引き上げるものは恋愛である旨を断言し、自分が恋している女は、たとえどんな姪婦であろうとも、純潔に見え、時には崇高にすら見えることがしばしばあると言い、されば女性が崇高に見える時は、その女性を恋している時だと言い切っている。この論理でゆくと、谷崎が母の顔や姿を「崇高」なものの第一に推しているのは、とりもなおさず彼が母に恋していたことになろう。エディプス・コンプレックスといわれる所以である。

祖父久右衛門は一代にして産を成した成功者であるが、またニコライ派のクリスチャンでフェミニストでもあったから、ひとしく我が子でありながら、男子をきらい、女子だけを溺愛したという。なにかんづく美貌第一の三女関は、美貌なるがゆえに祖父の寵愛を一身に集めたであらう。

父倉五郎は幼名和助、旧姓江沢、神田の酒屋「玉川屋」から谷崎家へ養子に来て関と結婚し、分家したのだが、正直で潔癖、それに臆^{おそ}怖^くがり屋で、名利に淡く、人見知りが強く、お世辞を言うことが大きらいな性格であった（「東京をおもふ」）。江戸っ児らしい好人物で、愛すべき男ではあったけれど、この性格では商人に向かない。そのために、彼は何をやっても成功せず、失敗に失敗を重ねたあげく、谷崎家は次第に没落する。その代わり、彼は妻を溺愛し、下町の商家の主人でありながら、吉原へ足

をふみ入れたことすらなかったという。関の死後は後妻も娶らず、亡妻の霊に対して、ひたすら読経を怠らなかつた（「幼少時代」「私の家系」その他）。関は娘時代を裕福に育っただけに、飯のたき方も知らず、女中がいなくなつてからの飯は常に倉五郎がたいたという。

潤一郎は幼少のじぶんから、この美しき母を尊敬し、思慕と憧憬をすら寄せていた。彼のエディブス・コンプレクス、飽くことなき耽美の性向は、この美しき母に対する思慕に触発されたと見てよからう。「母を恋ふる記」に始まり、「吉野葛」「少将滋幹の母」「夢の浮橋」とつづく一連の名作は、美しき母性への思慕を契機として成立した作品である。また、谷崎の描く理想美人が、謙虚でつましやかな女性ではなく、驕慢で誇り高く、男を酷使する婦人であることは、母の性格そのままではないまでも、それを誇張拡大したものであることは争えまい。そうして、その美女のためには自己を空しくして奉仕する男性は、これまた父の姿そのままではないにしても、それを拡充したものが原型を成しているのではあるまいか。かの松子夫人に対する後年の谷崎の献身より察するに、それは谷崎自身の姿、少なくともそうありたいと願う彼のポーズであることは間違いないけれど、彼をしてかかる姿勢を取らしめ、美への献身を生涯の生きがいたらしめたのは、幼少時代にまのあたり見た父母の姿勢であつたろう。

三 母の死

その母が亡くなつたのだ。谷崎にとっては大きな衝撃であつたろう。没齡は五十四歳、病名は丹毒

からの心臓麻痺。あの美貌自慢の母が醜い丹毒に犯されたのは皮肉で、般若はんじゃの面のような顔貌で死んだのでは、母自身も父も潤一郎も浮かぶ瀬がなかったろう。が、幸いにして丹毒は一週間ほどで快方に向かい、全快も間近しとだれもが信じていたやさきに、突如として心臓麻痺が襲ったのだ。このとき谷崎は執筆のために伊香保へ出かけており、危篤の電報によって急きょ母の枕頭へかけつけたのだ、すでに彼女はこと切れていた。死に目には会えなかったのだ。この間の消息は「晩春日記」(大正六年七月、「黒潮」及び「異端者の悲しみ はしがき」(同年同月「中央公論」)に、谷崎本人が詳細に記している。

それらによれば、このとき、母の発病と前後して、一女鮎子(前年生まれた)もまた淋巴腺の腫物に苦しみ、大学病院でそれを切開手術するという不幸が重なり、潤一郎夫妻はわが子と母と、二人を交互に見舞うというあわただしさであった。ことに母の病名が丹毒と判明してからは、病毒が嬰兒に伝染することを警戒しなければならなかった。ために妻千代子は母の見舞いや看護におもむいてはならぬと潤一郎はかたく戒め、父倉五郎もまた「千代は来るに及ばず」と再三注意したにかかわらず、千代子はさればというて母上の病気をそのままにしてはおけぬと、危険を冒してさっそく姑しうとめの枕頭へかけつけたのである。彼女は貞淑で健気な女性であった。

母は床の間の方を枕に、永囊を額に載せて仰向きに打臥したり。妻と看護婦とが両側にひしと寄り添ひながら、頻りに揉みさすりする左右の手のみは人間のさまにて、毒に祟られし首全体は此の世のものとしも覚えず。当年五十四歳とは云へ、産褥の外には未だ嘗て病の床につきたること

なき母上の、色白くきめ細かく眉目秀で、君が姉上にはあらずやなど屢々人に疑はれし若々しき容貌は、口鼻のありかもわからずふくれ上り、あまつさへ黒き煉り薬もて一面に塗抹されたれば、ぬばたまの夜の闇に迷ふ陰鬼の姿もかくやと思はれて、ひたすらに胸つぶるゝばかりなり。

なさけなや我が母、たとへ一時とは云へ、此の世に生きながら斯く浅ましき形に變じて、四十度に近き熱に浮かされ給ふこと、いかなる宿業のむくいにかあらむ。神よ、願はくば慇^{あは}れみを垂^たれさせ給へ。かく祈るほどに、母は我が足音を聞きつけたりけむ、腫れ上りたる両の眼^め瞼^だを指もて無理に押し開きつゝ、やうやう我が顔を仰ぎ視て、おゝ潤一か、妾は辛き目に遇ひつるぞや。あな苦しや。かくてあらんよりはたゞ死なんところ思へと、狂ほしげに呼ばるゝ声のみはなつかしくも紛ふ方なき母上なり。死なんとは何事ぞ、これしきのいたつきに、体質堅固なる母上のいかでか得堪へぬことあるべき。丹毒は苦しくともやがて必ず治癒すべきものぞ。かまへて心強くおはしませと勵ませば、看護婦も傍より言葉を添へて、かゝる高熱にかくまで心臓のたしかなるは稀に見るところなり。此の分ならばいさゝかもお気づかひあるべからずと云ふに、われも始めて意を安んず。

と、「晩春日記」は記している。

母関の死は、病いもようやく峠を越したと思われていた時の頓死であっただけに、肉親に與えた衝撃は大きかったに相違ないが、醜く腫れ上がった丹毒の跡が消えて、日ごろの色白な面貌にもどつていたことは、不幸中の幸いであつたらう。とりわけ幼少のじぶんからこの美しき母を慕いつづけ、そ

れが彼の文学の根幹をも成していた作家谷崎にとつては、何よりの至福であつたろう。そうしてさらに、「異端者の悲しみ」の中に書かれているような七、八年前の不幸のどん底からこの親子が救われて、比較的平静で安穩な心のゆきかいの中に母の最期を迎え得たことは、いかほど謝しても謝し切れぬ心地であつたろう。極貧に責められ親子兄妹がいがみ合う中でこの母を失つたのでは、作家の心に残る傷痕は容易に消えなかつたはずである。

四 「中央公論」の常連作家

「法成寺物語」以後、谷崎が発表した主なる作品は次のごとくである。

「お才と巳之介」(大正四年九月、「中央公論」)

「神童」(大正五年一月、「中央公論」)

「恐怖時代」(同年三月、「中央公論」発禁)

「人魚の嘆き」(大正六年一月、「中央公論」)

「鶯姫」(同年二月、「中央公論」)

「玄奘三藏」(同年四月、「中央公論」)

「異端者の悲しみ」(同年七月、「中央公論」)

「十五夜物語」(同年九月、「中央公論」)

「ハッサン・カンの妖術」(同年十一月、「中央公論」)

この外にも、小説や隨筆その他は發表されているけれども、主要なる作品のことごとくが「中央公論」誌上に掲載されていることに注意したい。彼はこの雑誌の常連作家となつた観がある。ここへ作品が掲載されれば一人前の作家といわれたその雑誌に、毎月もしくは隔月に登場する。押しも押されもせぬ花形作家となつたのである。

本編（「兄弟」）もまた、ここに發表された。幻想的な作品「鶯姫」を除けば、久方ぶりで平安朝を舞台とする作品である。作者が熟知する王朝の古典から取材した小説である。

円地文子氏は評している。――

私は、「兄弟」の中の王朝貴族の血で血を洗う政權の爭奪が、美しい女御の生涯を簡潔に描いた優雅な絵巻きの中に巧みに封じこまれているこの作品を、今でもこよなく愛している。芥川龍之介の王朝物と趣きを異にしながら、所謂歴史小説にいかぐわしい氣韻を漂わしている作品である。

（大全集、第五卷、月報）

こういう感想をもらすものが、国文学者の中にも意外に多い。しかし、評壇をにぎわすほどの賞讃を浴びたわけではなく、またいわゆる問題作として世の視聽を集めたこともない。

五 梗概

まず、例によって梗概を記す。

時代は平安朝、冷泉・円融の代。つまりか的一条朝のけんらん、道長の繁榮に先立つ時期。藤原兼

家の女で、冷泉院の女御となった姫がいちおう女主人公とされている。

(1) 或る春の日の夕方、姫は都の四辻で「夕占問い」を試み、行きずりの老婆から、輝やかしい未来を予告される。后となって帝王の母となるべきことを告げられる。

(2) その予告のごとく、やがて姫は冷泉上皇の女御となるが、上皇は元方民部卿の悪霊に祟られて狂気の人であった。姫の父、大納言藤原兼家は、豪胆で才智に長けた政治家、されば官位も常に伯父の兼通を抜いていたけれども、長兄に当たる太政大臣伊尹の死後、兼通の策謀によって関白職を先んじられ、以後、不満と失意の日がつづく。

(3) その伯父兼通の策謀とは、多年弟に官位を越されていた恨みを晴らすために、妹の村上中宮安子にすぎり、関白職は兄弟の順になすべしとの一札をもらい、それを当帝(円融、安子腹)に見せて、強引に関白の地位にありついたものである。以後、兼通・兼家の兄弟は犬猿の仲となる。しかも皮肉なことに、この二人の邸宅は、閑院を中にはさんで至近の距離にあった。そんな中で、姫(冷泉女御)は皇子を出産する。

(4) その翌年、関白兼通は重病危篤の身となる。折りから兼家の牛車が近づく音を聞いて、日ごろ犬猿の仲であった弟も、自分の最期を見舞ってくれるものと察し、そうなればこちらも多年の恨みを解いて関白職を譲ろうと心が和む。ところが兼家の車はわが門前を素通りして内裏へ向かった様子。怒った兼通は、足腰も立たぬ病軀を提げて参内し、最後の除目を行う。すなわち、関白は従弟の左大臣頼忠にゆずり、弟兼家を治部卿に貶し、帰宅してまもなく薨去する。

(5) 新関白頼忠は温厚な人柄で、兼家の逆境に同情し、右大臣に推挙する。これに勢いを得た兼家は、次女を円融帝の女御として入内させる。この「梅壺の女御」は早くも妊娠し、やがて皇子を出産する。関白頼忠もまた娘を入内せしめ、彼女は中宮に冊立されたが、ついに天皇の胤^{たね}を宿すことができなかった。それに反して、兼家は二人の女子をそれぞれ上皇・天皇の女御にし、ともに皇子をもうけていることから、その東三条邸は常に華やかな活気に充ちていた。翌年の正月、庚申^{こうしんまち}待の夜、二人の女御の部屋には、多くの兄弟や女房たちが集まって、夜もすがらの物語に長夜のふけるのも忘れていたが、明け方、院の女御は脇息にもたれかかったまま、眠るがごとくに亡くなった。しかし、彼女の生んだ居貞親王^{おきさだ}は後に帝位に即^つき、彼女も皇后の位を追贈された。

〔初出本文との比較〕

大きな異同はほとんどない。ただ、小さな削除・補入・改変は若干ある。

(a) 削除の例——「一」の初め(5・一八一)に、「けふ此の頃の摂政関白の栄華のさまや、」とある件り、初出では「けふ此の頃に時めいて居る摂政関白……」とある。「時めいて居る」は不要の冗句と見なして削除したのであらう。摂政関白ともなれば「時めいて居る」のが当然なので、たしかに不要の冗句である。

「二」の初めの方に「女御が二条堀河の御殿から」(5・一八六)とある件り、初出では「女御が二条堀河の院の御殿から」とある。この女御は冷泉院の女御に上ったのであるから、「御殿」といえば「院の御殿」に決まっていると考え、削除したものであらう。

「三」の初めの方に「霸氣に乏しい人間に見えても」(5・一九〇)とある件り、初出では「……人間のやうに見えても」とある。「のやう」は不要と見て削除。次の一九一P三行目「中宮として時めいて」は、初出「中宮として世に時めいて」とある。「世に」は不要と見て削除。

「五」の「乳人」のセリフ「まだいくらもごさいますが」(5・二二三)は、初出「まだまだいくらも……」とある。重複の「まだ」を削除。二一四P四行目の道隆のセリフ「お起し申すが」は、初出では「お起し申す方が」とある。「方が」は不要と見て削除。

(b) 補入の例——「一」の「九条殿の御遺誠」の文章(5・一八二〜一八三)に訓み仮名を振ったこと。初出では振ってない。訓み易からしめるための補入。

「五」の「乳人」のセリフ「たしか去年の夏の事だったと申します。」(5・二二二)は、初出では「……夏の事だと……」とある。過去の事件なので「だった」と過去にしたもの。次の二二三P五行目「緊張し切った眼つき」は、初出では「緊張した眼つき」とある。「し切った」の方が緊張の度が強いと考えてそうしたものの。

(c) 改変の例——「五」の初めの方に「その年の冬に姫君を内に参らせて」(5・二〇五)は、初出では「……内へ参らせて」。テニヲハの変改。次の二〇六P「そのやうな様子もない。」は、初出では「そのやうな仰せもない。」とある。「仰せ」でも「様子」でも、この場合はさしたる相違はない。ここは円融天皇の行動や心理を叙した件りであるから、初出のごとく「仰せ」でも、いっこうに差